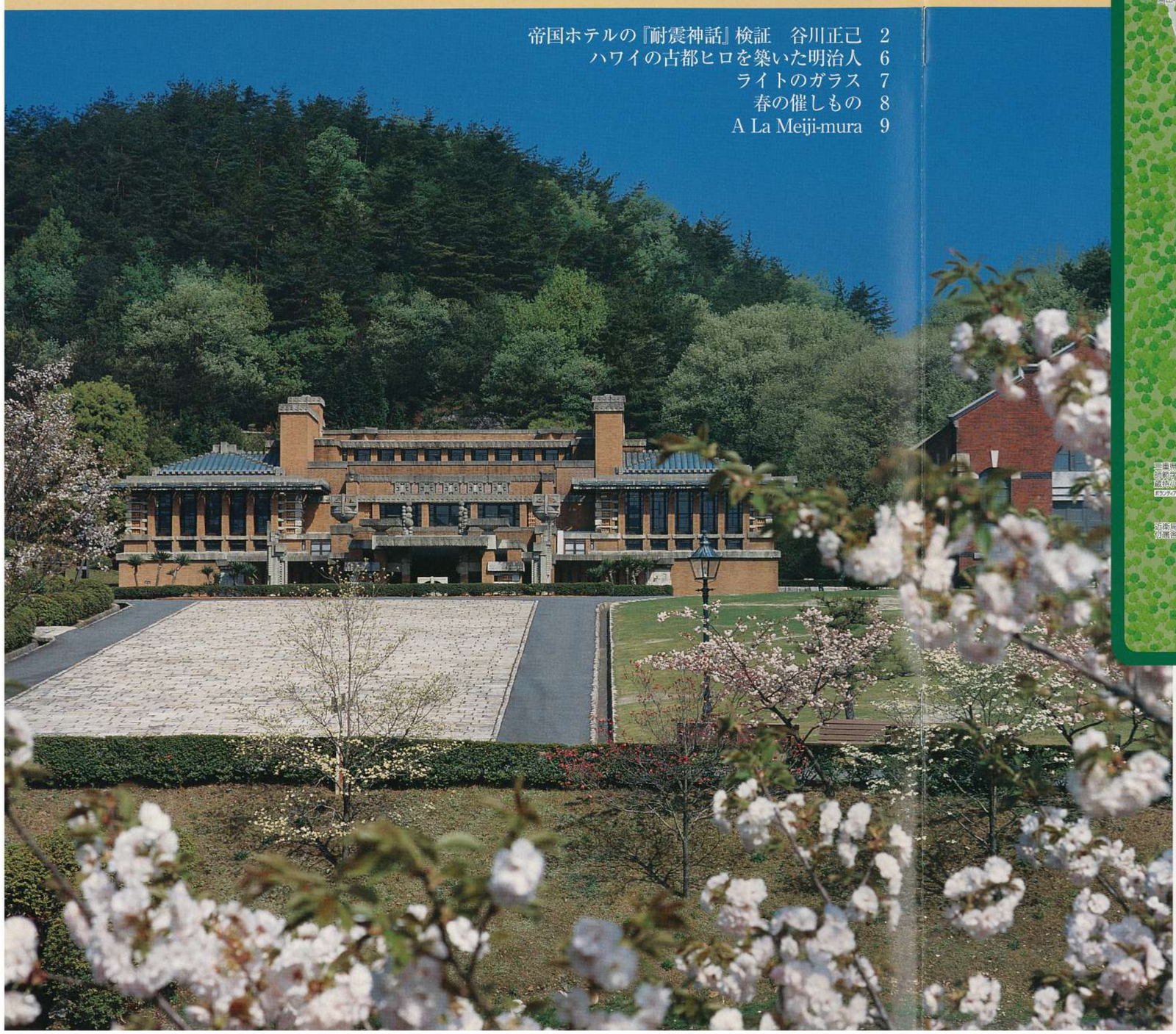
MEIJIMURA

明治村だより

Vol.55 2009 Spring

帝国ホテルの『耐震神話』検証　谷川正己　2
ハワイの古都ヒロを築いた明治人　6
ライトのガラス　7
春の催しもの　8
A La Meiji-mura　9



平成21年2月26日発行
「明治村だより」第55号（平成21年　春）

発　行　博物館明治村
〒484-0000　愛知県犬山市内山一番地
電話（0568）67-0314
http://www.meijimura.com
製　作　大日本印刷株式会社

『明治村 だより』 第56号発行のお知らせ
発行時期　平成21年7月中旬（予定）
申込方法　「明治村だより」第56号ご希望の旨及びご住所・お名前を明記の上、送料140円切手とともに封書にてお申し込み下さい。

ライトのガラス

博物館明治村内の帝国ホテル中央玄関の中に二つのガラスが展示されています。帝国ホテルを設計したフランク・ロイド・ライトのデザインによるもので、いずれもモンドリアンの絵画を髣髴させる幾何学的な分割がなされています。

ライトのデザインした装飾的な窓は、その装飾性の高さから「アートガラス」、「ライトスクリーン」などと呼ばれています。

写真1はフランシス・リトル邸のリビングルームの窓です。この窓はアメリカのメトロポリタン美術館で収蔵されていたもので、帝国ホテル中央玄関の解体材（玄関庇上の大谷石製の装飾）と資料交換という形で昭和六十三年、明治村へもたらされました。

フランシス・リトル邸（Little House II, Northome）はアメリカ・ミネソタ州のミネアポリスの郊外に位置するミネトンカ湖の畔の町ワイザタ（Wayzata）の丘の上に一九一二年に「夏の家」として建てられたものです。フランシスとメアリーのリトル夫妻は、一九〇三年にイリノイ州ペオリアに最初の住宅をライト初期の住宅デザイン「プレーリー・スタイル（Prairie Style）」で建ています。その後リトル一家はミネアポリスに転居し、一九〇八年、再びライトに新居の設計を依頼します。折りしも、ライトは施主の夫人（メイマ・ボースニック・チェイニー）と恋に落ち、ゴシップから逃れるためヨーロッパへ旅立ってしまったため、依頼から竣功まで四年の時を要することになりました。

一九一二年に竣功したこのリトル夫妻の「夏の家」は、一般的なライトの業績の年代区分に当てはめると、年代的にはやや遅いのですが、プレーリー・スタイルに分類され、その傑作の一つといわれています。

リトル夫妻はライト同様、音楽好きで、この住宅のリビングルームは五十五フィート（約十六・八m）ほどの間口があり、コンサートホールとしても使用できるよう設計された広大な住宅です。このリトル邸の窓はリビングルームの壁面一面に埋め尽くされ、外の景色を取り込みつつ、規則的に配列された、様々な大きさのガラスの組み合わせからは、あたかも音楽を奏でているようなリズミカルな印象さえ受けます。一説によると三角形のガラス片はリトル邸の近くにあったミネトンカ湖のさざ波を表しているともいわれます。所々に小さな不透明な三角のガラス片を配することで、より透明感を際立たせ、屋外の景色を取り込み、屋外屋内の一体感を創出しています。

残念ながら、このリトル夫妻の夏の家は一九七二年に取り壊さざるを得ない状況となり、その情報を得たメトロポリタン美術館により記録が残され、その部材の一部が同美術館に保存されるとともに、リビングルームが同美術館内のアメリカンウィングに復元されました。またライブラリーはペンシルベニア州のアレンタウンの美術館に復元されています。

写真2のエヴァンス邸の窓は、シカゴ美術館との資料交換で、明治村へ贈られたものです。

一九〇八年にシカゴ近郊に建てられた、エヴァンス邸もプレーリー・スタイルの住宅の一つです。中心に暖炉を据えた十字型の平面をもち、この窓は一階二階ともに取り付けられたものです。

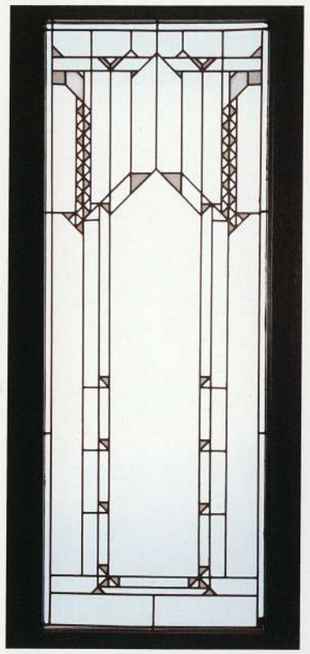


写真1　フランシス・リトル邸のガラス

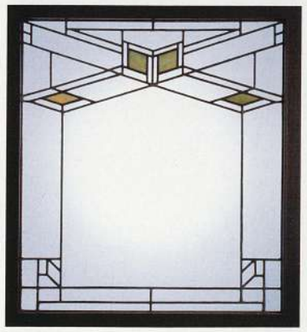


写真2　R.エヴァンス邸のガラス

最後に現在は公開していないものですが、ライト晩年の作品であるベス・ショロム教会堂（シナゴーグ）のガラス（写真3）を紹介します。

ベス・ショロム教会堂は、一九五四年、ペンシルバニア州のフィラデルフィア近郊の町、エルキンズ・パークに建てられた、ユダヤ教徒のための教会堂です。

施主のコーエン師はこの教会堂設計のために、ライトへユダヤ教に関する膨大な資料を送りつけ、ライトもその期待に応え、資料をチェックし、ユダヤ教の信仰を具現化した建物を建てたといわれます。その姿は、モーゼが十戒を授けられたというシナイ山でのユダヤの歴史の絶頂期を髣髴とさせるものだと評されています。この教会堂は鉄・コンクリート・ガラス・金属・プラスティックなど、どちらかというと無機的な材料が使用されていますが、屋根前面にこのワイヤーの入ったガラスが用いられ、光が屋内空間に溢れ、ライトの唱える有機的空間を創出しています。

写真3　ベス・ショロム教会堂
シナゴーグのガラス

●参考文献

Lind, Carla "Frank Lloyd Wright's Glass Designs"
Lind, Carla "Frank Lloyd Wright's Lost Buildings"
Lind, Carla "Frank Lloyd Wright's Furnishings"
INAXライブミュージアム企画委員会「FLライトがつくった土のデザイン水と風と光のタイル」二〇〇七
日本大学工学部谷川研究室「The Wrightiana」No.413　一九八八
日本大学工学部谷川研究室「The Wrightiana」No.493　一九八八
日本大学工学部谷川研究室「The Wrightiana」No.567　一九八九
日本大学工学部谷川研究室「The Wrightiana」No.627　一九八九
日本大学工学部谷川研究室「The Wrightiana」No.983　一九九二
二川幸夫・谷川正己「GIグローバル・インテリアフランク・ロイド・ライト」一九七五
二川幸夫「GAグローバルアーキテクチュアNo.40（フランク・ロイド・ライト）」一九七六
Heinz Thomas A. "Frank Lloyd Wright Glass Art" 一九九四

春の特別ガイド＆建物講座

❶ 建築の巨匠フランク・ロイド・ライド没後50年
「帝国ホテル中央玄関をめぐる」 事前予約・定員制

普段は非公開の帝国ホテル中央玄関3階を特別に公開するほか、当時の解体材を手にとっていただいたり、明治期に開業したホテルの資料の数々も併せてご紹介します。

- 開催日： 3月29日(日)、4月26日(日)、5月9日(土)、5月24日(日)、6月14日(日)6月28日(日)、7月12日(日)、
- 時間：13:30～15:00（約1時間30分）
- 参加費：1,000円（呈茶代含） ※明治村入村料が別途必要です。
- 定員：各日15名 ※先着順
- 募集期間：各開催日の3日前の17時まで。

❷ 明治村建物講座
「ココがみどころ! 明治村の建物」

明治村建築担当が、明治村の建物の見所をスライドを交えながら分かり易く説明します。<第四高等学校物理化学教室>

- 開催日：5月16日(土)、30日(土)
- 時間：10:30～11:30（約1時間予定）
- 参加費：無料 ※明治村入村料が別途必要です。
- 定員：50名 ※満席の場合は室内に入れない場合がありますのでご了承下さい。

❸ 明治村植物探訪 事前予約・定員制

ボランティアガイドとともに明治村植物探訪に出かけてみませんか？

- 開催日： 3月22日(日)、4月12日(日)、5月10日(日)
- 時間：13:00～14:30（約1時間30分予定）
- 参加費：無料 ※明治村入村料が別途必要です。
- 定員：各日20名 ※先着順
- 募集期間：各開催日の3日前の17時まで。

■ 映画「劔岳 点の記」公開記念展

明治時代の測量手の生き様を描いた新田次郎原作・木村大作監督の映画「劔岳 点の記」は明治村内各所で約２週間にわたり撮影されました。映画の一般公開（6月20日）を記念し撮影の裏側映像やロケ風景のパネル展示などを行います。

- 開催日：4月25日(土) ～7月20日(祝)
- 場 所：東山梨郡役所2階ほか

のりもの探険隊

SLバックヤード探険隊 事前予約・定員制

- 開催日：5月16日(土)、6月20日(土)、7月18日(土)
- 集 合：12:30（SL東京駅）〈終了14:00頃〉
- 対 象：小中学生及び保護者（2名まで可）
  〈小学3年生以下の方は保護者の同伴必要。同伴者も有料〉
- 参加費：お一人様500円（入村料は別途必要です）

期間 平成21年 3月7日(土)～7月26日(日)

～受け継がれし黄金郷～

実体験型ロールプレイゲーム
冊子【探険の書】に記されている謎や問題を解きながら、明治村内に隠された宝箱を探し出すという体験型の宝探しゲーム。（探険ゲーム監修：【宝探し専門サイト】赤い鳥）

販売期間： 3月7日(土)～7月26日(日)
受付場所： ミュージアムショップ（正門）、SL東京駅売店（北口）
コ ー ス： Ⅰ.体験コース（小学校高学年向け）／200円
Ⅱ.ルーキーコース（中高校生、大人・初心者向け）／300円
Ⅲ.ベテランコース（大人・中級者向け）／500円
Ⅳ.キャプテンコース（大人・上級者向け）／500円

Ⅴ.アドバンスコース（難関・上級者向け）
料金：1,000円 5月16日(土)から発売！

※「キャプテンコース」に合格した方のみがご購入いただけます。ご購入の際は、合格印の押された「キャプテンコース」の探険の書を必ずお持ちください。

Ⅵ.伝説の探険家コース（超難関・超上級者向け）
料金：1,000円 6月13日(土)から発売！

※「アドバンスコース」に合格した方のみがご購入いただけます。ご購入の際は、合格印の押された「アドバンスコース」の探険の書を必ずお持ちください。

5月2日(土) ～5日(祝)は夜18:30まで延長開村いたします。

※催事内容は予告無く変更・中止する場合がございます。詳しくはお電話でお問合せいただくか明治村公式HPをご覧ください。

お問い合せ・申込先 http://www.meijimura.com/ または 0568-67-0314

無限の可能性を秘めて

●大明寺聖パウロ教会堂（5丁目56番地）

写真１：外観

日本にキリスト教が伝来したのは天文十八（一五四九）年、宣教師フランシスコ・ザビエルの来日を契機とします。以後、一時容認された時期もありますが、豊臣秀吉、徳川家康の政権時に禁制となり、およそ二百数十年の受難の時期をむかえました。幕末より、西欧列強の圧力を受けて、開国に踏み切ったのを端緒として、明治六（一八七三）年、ようやくキリシタン禁令の高札が撤去されました。

それ以前、既に長崎には在留外国人の礼拝のために本格的な教会堂、大浦天主堂（元治二〈一八六五〉年竣工）が建設されていましたが、日本人信者を対象とした教会堂が建てられるようになったのは、明治六年以降になります。この大浦天主堂が建てられた十五年後の、明治十二（一八七九）年頃、大明寺聖パウロ教会堂（文中以後大明寺教会堂）（写真１）が、長崎湾の伊王島に創建されました。鐘楼を除けば、普通の農家風の構造をもつ建物でありながら、内部は一転してゴシック様式の空間が広がりを見せる不思議な面白さがあります。それは、日本の木造建築の中に教会堂建築を苦心して取り入れた天井構成に他なりません。当時、手慣れない教会建築ながら、神に捧げる聖なる場所に少しでも荘厳な雰囲気を持たせようと、懸命な努力を払った様子が至るところに見ることができます。

教会堂内部は中央身廊と左右側廊からなる三廊式です。身廊部は幅十二・七尺（約四メートル）、漆喰仕上げの八分リブ・ヴォールト天井になっています。この様式は「コウモリ」傘を広げた様に似ていることから、「コウモリ天井」（写真２）と呼ばれています。このようなリブ・ヴォールトにより、内部空間は縦の線が強調され、天に向かっての上昇感を持ちます。しかしながら大明寺教会堂は、西洋に見られる教会堂とは異なり、日本家屋にある単層の低い屋根によって高さが抑制されます。この屋根の低さが、あらゆる制限の中から独特の様式を生み出すことになりました。

その一つは、大明寺教会堂において、柱間、いわゆる一スパンを一つのアーチで繋ぐと、大きなアーチは緩慢になり縦の線を強調しません。そこで、一スパンを二つのアーチに分割して、柱間の垂れ下った部分に飾りペンダント（吊宝珠状の飾り）（写真３）を付ける工夫が成されています（図１）。このような他に類を見ない独自の手法の案出によって、中央祭壇に向かう小気味良いリズムを持たせています。

次にこの屋根の低さは、側廊部にも影響を及ぼしました。側廊部は幅九・八尺（約三メートル）、リブ・ヴォールト天井を組み上げる高さの余裕が無いために、日本古来の「竿縁天井」（写真４）を少し曲げて曲面にし、西洋の四半円ヴォールト天井を真似た構造になっています。これは、身廊部と側廊部の天井の起点位置の違いから生じ、側廊部の天井を水平に張ることが出来ず、外側を下に折り曲げて「へ」の字型に貼ることを余儀なくされました（図２）。このような試みは、できるだけ天井を高く構成しようとする欲求を満足させようとした構造上の必然的結果であり、独自の形態を有する合理的な内部空間を構成した教会堂となった所以でもあります。

さて、大明寺教会堂の建築を担当したのは、フランス人のブレル（Bourelle）

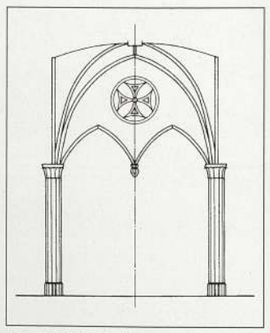


図１：大明寺教会堂断面図

写真３：吊宝珠飾り

写真２：コウモリ天井

光の交響曲（シンフォニー）

●帝国ホテル中央玄関（5丁目67番地）

写真1：1階ロビーと光の籠柱

「音楽と建築との間には、創造性におけるヴィジョンの類似性がある。素材の本性と使用法とが違うだけだ。」フランク・ロイド・ライトの言葉が示すように、次々と眺望が展開する帝国ホテルは交響曲にたとえることができます。

第一楽章

夜明けの情景の如く、静かに緩やかに序章が始まります。低い入口を過ぎると徐々に現れるのは間接照明を組み込んだ柱―光の籠柱（かごはしら）です。表面が幾何学文様の大谷石と細かい縦縞の入った煉瓦（れんが）のタイル（スクラッチタイル）で構成されていますが、一部は装飾煉瓦（テラコッタ）が使用されています。凹凸のあるスクラッチタイルと多孔質の大谷石は微妙な影をつくりだし、テラコッタの透かしからは森の木漏れ日の様に柔らかな光が温かく客人を出迎えます。外観、内装と同じ素材が使われているため、天井まで伸びる柱も威圧することなく空間に溶け込んでいます（写真1）。ライトは著書『ライトの住宅』の中でこう述べています。「人工照明については、家と一体でなければならず、自然光にできるだけ似たものにするのがよい。一八九三年以来、私は露出した電球は使わず、棚の内側だとか、くぼみとかに入れて、建物自体から光が来るようにしてきた。昼間の光と同じ方向から来るような効果にしなくてはならない。」

第二楽章

ラウンジへの狭くて暗い渓谷の道を抜けた瞬間、目前に雄大な景色が広がります。圧迫感を与える一歩手前まで天井の高さを抑えた後、水平方向に視線を導き空間の広がりへと関心を向かわせる方法は見事と言わざるを得ません。

ライトは壁ともいえる天井まで達するガラス面を水平線と垂直線で幾何学的に分割しました。分割で和らげられた光は、白い天井で反射し拡散します。ラウンジの他、帝国ホテルのほとんどの窓には市松模様や千鳥模様の装飾が付けられています。これは二枚の板ガラスに金箔を挟み込んだものと透明ガラスを、格子状にはめ込み鉛線で接いだもので、見る角度により光り方が変わります。

第三楽章

再び狭い階段を上がると、天窓が真上から自然光を導き入れている場所に出ます。銅板を打ち抜いて作った覆いはフィルターとなり、幾何学的な陰影をもたらします（写真2）。その奥には装飾が一切ない一枚板の嵌（は）め殺し窓があります。見晴らし窓と呼ばれるこの窓の前で視点は内から外へと移動します（写真3）。

回廊の角では光の籠柱を二本同時に目の高さから見ることができます。ライトの帝国ホテルはマヤ文明を彷彿させるとよく言われますが、東洋的な雰囲気も醸し出しています。手前は透彫煉瓦から漏れる白熱灯の光が日本の釣燈籠（つりどうろう）を思い起こさせ、奥はインドネシアの影絵ワヤンのように幻想的です。

ティーバルコニー側は日本建築の影響を受けたと思われる水平線の強調が見られ、正面の窓には垂直の分割がありません。ライトは水平線が人間に安らぎを与える線とみなしています。しかし、デザインが冗長になるのを避けるためなのか、窓の上にはアクセントとなるコンクリートブロックが使われ、そこに控えめに開けられた穴からの光は視覚的効果をあげています（写真4・5）。

第四楽章

三階は同じ模様の窓と柱が等間隔に並び、切れの良いリズムをきざんでいます。ライトは特に上方から拡散する明かりを好みました。目隠しとなる木製パネルは進入する光を自然に拡散する役目を果たし、透かしの幾何学模様は、窓ガラスのモザイクに通ずるものがあります（写真1上方）。図書室があった場所から正面を見てみますと、三階の垂直性が二階の水平性と対比をなしていることがわかります。またティーバルコニーの下には柱がないため、ここから二階と三階は宙に浮く二段の吊り橋の様に見えるという不思議な光景に出合えます（写真5）。

さあフィナーレです。もう一度ロビー中央に立ちぐるりと見渡してみて下さい。自然光でも、人工照明でも光で遊ぶのが好きだったというライト。大谷石とスクラッチタイルが奏でるメロディが、窓からの自然光とハーモニーを成しているのが聞こえてきませんか。

写真2：天窓

写真3：見晴らし窓

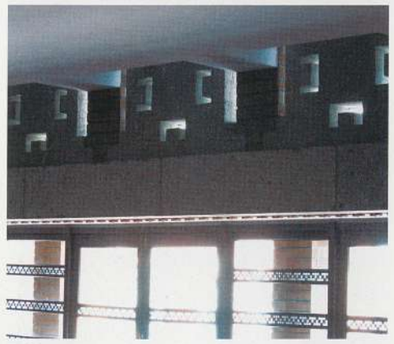


写真4：ティールームのコンクリートブロック

写真5：ティーバルコニー側の2・3階部分

【参考文献】
フランク・ロイド・ライト原著　遠藤楽訳『ライトの住宅』彰国社　一九七五年
ペーター・ブレイク原著　田中正雄　奥平耕造訳『現代建築の巨匠』彰国社　一九八一年
越智草英監訳『フランク・ロイド・ライト スタイル⑥ガラスデザイン』集文社　一九九八年
酒井一光『窓から読みとく近代建築』学芸出版社　二〇〇七年
『Frank Lloyd Wright』X-Knowledge HOME 2002 DECEMBER Vol.11　二〇〇二年

写真4：竿縁天井

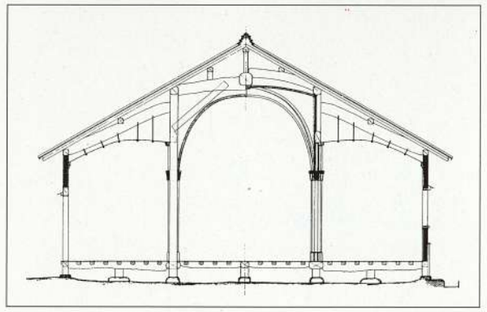


図2：大明寺教会堂内部構成立面図

神父であり、大工棟梁は地元伊王島舟津出身の大渡伊勢吉（おおわたりいせきち）（弘化元（一八四四）年十月生）で、当時三十五歳でした。伊勢吉は二十歳の時に、大浦天主堂の建設に従事した経験の持ち主であり、若い大工が見よう見真似で習得した西洋の技術を、地元の教会堂の建設に精一杯披露しようとした姿が伺えます。

このように、九州地方の教会堂建築は、明治初期から発展を続け、大正前半に至って頂点に達したといわれています。その最も早い時期に建設された大浦天主堂を手本として、工匠たちが建築技術を会得していったというよりもむしろ、工匠たちが単純な形態から徐々に独自の教会堂建築へと発展させていきました。その過渡期の面白さを大明寺教会堂に見ることが出来ます。こうした発展過程に辿り着いたのは、中世カトリック全盛期に憧れる神父たちの考えと、伝統を重んじる信徒たちの結果が成し得た形ではないでしょうか。

【参考文献】
川上秀人『長崎県を中心とした教会堂建築の発展過程に関する研究』
三沢博昭（写真）・川上秀人『大いなる遺産　長崎の教会』
太田静六『長崎の天主堂と九州・山口の西洋館』
雑賀雄二『天主堂物語』